

授業マネジメントの勘どころ： “まなざし”の共有を求めて(2)

田邊 祐司 Tanabe Yuji
(専修大学)

1 はじめに

教師なら誰もが生徒のまなざしを一手に集める授業にあらがわれます。こうした授業には独特の小気味良いリズムがあります。しかし、「リズムのある授業」と一口に言っても、当然、学校の体制や環境、教師の信念や指導法、語り方、さらには生徒のレベル、モチベーションなど内外の様々な条件が絡み合い、「ここを押さえれば大丈夫!」といった公式は存在しません。にもかかわらず、熟練教師の多くがこうした授業を自家薬籠中のものに行っているのです。それは種々の制約がある中でも、リズムを起す勘どころ (rhythm generators: 以下, RG) を外していないからでしょう。今回はこの RG という観点から、前回同様、3人の熟練教師の考え方を織り交ぜながら、まなざしが共有される授業づくりについて考えてみます。

2 動・静

授業にリズムを持たせるために3人の教師が常に意識している RG が「動・静」という観点からの授業づくりです。

A先生は「動」を、生徒を動かしながら、考えさせ、理解させる部分とし、ペアワークや、生徒からクラス全体への働きかけを含む帰納的なものととらえています。逆に「静」とはじっくり考え、消化するための活動などを意味するとのこと。さらに、「どちらが良い、悪いというのではなく、ゆるやかな発想で、「動・静」を授業デザインの中心に据えておくと、monotonousな授業に勢いが出て、生徒の集中が高まります。」と力説されます。

C先生もほぼ同じ考えですが、彼女の場合、授業過程全体を見通して、授業は「動」から入り、最後

は「静」へと収斂させるイメージを描いており、「動」の部分では生徒に英語を使わせることを意識し、「静」では学んだことをそれぞれが咀嚼する時間を持てるように工夫しているそうです。

B先生は、「動」をよりダイナミックに定義し、例えば新出単語などの導入では、CDを使って listen-and-repeat をしたあとに、ペア同士で向かい合わせ、互いに単語のストレスの箇所を手を叩き合わせながら単語の強弱リズムを身体でつかみとる活動を盛り込んでいるとのこと。

なお、「動」のあと、生徒がざわついて次の段階にスムーズに入れないということがしばしばあります。そういう場合には、キッチン・タイマーを使って時間を意識させたり (B先生はタイマーを20台常備!)、終わったペアから着席させるなどがよくとられる手法ですが、C先生の場合は「活動で気づいたことを自由にノートにメモさせる」「疑問点を付箋紙に書かせる」など、次の指示を与えておくのが一番だと力説されていました。

3 緩・急

「動・静」に次ぐ別の視点が「緩・急」です。これはつまり、授業のそれぞれの transaction のテンポに関する RG です。この RG は実習生と熟練教師の比較研究のときによく指摘されるポイントですが、初心者の場合、余裕がないためか、どの transaction も同じテンポで進めがちです。そんなときもやはり、生徒をスピードにのせる部分と、ゆっくりと噛んで含める部分を交互に織り交ぜることを意識しているという点で、3人の見方は一致しています。

C先生は「緩・急」をとりわけ大切にしています。「初学者だからゆっくりと噛んで含めるように説明

したり、活動させるというのは教育の原則でしょうが、あえてスピードを上げることで、逆に真剣なまなざしを向けてくる場合が多いことを経験から学びました。テンポを下げることが、必ずしも理解につながるとは限らないことを知っておくと、授業のリズムが変わり、まなざしを共有できるようになりました。」と述べています。

A先生は、「学習者中心主義にシフトした今、ゆっくりめに説明したり、時間をかけて練習をさせることが、かえって学習の障がいになっているのでは？」という疑問を抱いています。かつて、受験、実践の両面で成功したといわれる、昭和初期に行われた“福島プラン”は、徹底的なスピード・トレーニングで知られています。学習者におもねるだけはいけないのではと思ひ、対話などではスピード感を重視させるクイック・レスポンスを心がけており、それが授業のリズム、ひいてはまなざしの共有につながっているようです。」と語ってくれました。

B先生の授業ではやはりタイマーが大活躍。発音、音読、Q&A、ペアなどの活動では、積極的に生徒をタイムフレームにはめて、テンポの切り替えを奨励するそうです。

以上のごとく、熟練教師は「動・静」に加え、「緩・急」というテンポも、授業のリズムをつくる大切なRGとして意識し、生徒の反応をうかがいながら、積極的にスイッチの入れ替えをして、生徒の集中力を切らさないように努めていることがわかりました。

4 クライマックス(アンチ・クライマックス)

熟練教師の授業で、「お主、やるな〜!」と感ぜられるのがクライマックス(漸増(層)法)への配慮です(反対はアンチ・クライマックス:漸降(減)法)。これはtransactionのそれぞれにミニクライマックスを用意しながら、徐々にその日の授業の最大のクライマックスへと駆け上がっていく手法です。

B先生は「趣味の登山を授業づくりのイメージにしています。一段登るごとに、小さな達成感を感じることができるような仕掛けをし、山場の頂上で大きな喜びが起るようなリズム感を大切にしています。」と、こうした観点からのリズムづくりもまた大

切なRGだとしています。

A先生はクライマックスを作るためには、「たくさん、盛り込まないことが肝要です。それから文法が目標であるならば、やはり最初からこれはこうだからといった形の提示は控え、あくまで生徒に考えさせながら、その原理をつかませる手法の方がリズムにのって来るように感じています。」としています。

C先生は、クライマックス手法が大事なRGであることは認めながらも、クライマックス後のアンチ・クライマックスでの「降り方」もまた重要と考え、「タスクなどの活動に目が向きがちですが、生徒が活動で学んだことをいかに自分のものにするかにも目を配る必要があり、それが授業全体のリズムや生徒とのまなざしの共有にもつながっています。」との持論を展開されました。ちなみに彼女は授業の終わりには、recapを欠かさないとのことです。これはrecapitulate(「要約する」)を省略した言い方(例: Let me recap what we did today.)で、確かに授業の終わりの認知的な区切りとなり、授業のリズムにも貢献すると思われる。

5 今回のまとめ

まなざしの共有を、授業のリズムづくりという観点からまとめてみました。RGのうち紹介できたのは3つのみで、いずれも教職の授業や研修会で習うようなことだったかもしれません。しかしながら、3人の教師はそれらを理論だけにとどめず、自分の授業へと取り入れ、かつ、自己流のアレンジを施しているのです。紹介した先生方の手法には微妙な差異もありますが、動きを起こし、スピード・アップを図り、山場をこしらえるという点だけでなく、生徒へのアンテナを目一杯に張り、生徒の反応をモニターしながら、実態に合わせた微調整(fine-tune)をし、リズムを起こしているという点も一致しています。こうした勘どころにベテランの技を垣間見た思いがしています。

【参考文献】

赤峰準(2003).「リズムから生み出される英語の力」『TEACHING ENGLISH NOW 別冊18号』三省堂。
滝沢広人(2005).「リズムとテンポをつくり出す英語授業スキル」明治図書出版。